碩士學位論文

「の」を介した程度副詞の名詞修飾に関する一考察

済州大學校　大學院

日語日文學科

佐久間司**郎**

2009年1月

「の」を介した程度副詞の名詞修飾に関する一考察

指導教授　金勝漢

佐久間司郎

이 論文을　日語日文學　碩士學位　論文으로 提出함

2009年　1月

佐久間司郎의　日語日文學　碩士學位　論文을 認准함

審査委員長＿＿＿＿＿＿＿＿印

委　　員＿＿＿＿＿＿＿＿印

委　　員＿＿＿＿＿＿＿＿印

濟州大學校　大學院

2009年　1月

A Study on Degree Adverbs as Noun Modifiers through ‘の’

Shiro Sakuma

(Supervised by Professor Seung-han Kim)

A thesis submitted in partial fulfillment of the requirement for the degree of Master of Arts

2009.1

This thesis has been examined and approved.

Department of Japanese Language and Literature

GRADUATE SCHOOL

CHEJU NATIONAL UNIVERSITY

<한국어 초록>

「の」를 통한 程度副詞의 名詞修飾에 관한 一考察

佐久間司郎

濟州大學校　大學院　日語日文學科
指導教授　金勝漢

부사는 일본어 교육의 현장에 있어서 그다지 중요시 되지 않는 학습 항목의 하나이다. 그러나 자연스러운 일본어 표현을 하기 위해서는 상황에 따른 적절한 부사의 사용이 필요하다. 최근 부사에 관한 연구가 늘어 가고 있지만 아직 충분하다고는 할 수 없다. 그러한 배경으로 성분의 정도를 수식하는 '정도 부사'도 그 연구 대상의 하나라 할 수 있겠다.

본 연구는 정도 부사 중에서도 'の'를 통한 명사 수식에 초점을 맞추었다. 그리고 그러한 정도 부사가 어떤 명사를 어떤 조건으로 또 어떠한 의미를 가지고 수식하는지를 확실하게 규명하고 더 나아가 그 체계에 대해서 살펴 보는 것을 목적으로 하였다. 그 결과 아래와 같은 결론을 얻게 되었다.

1) 연구 대상인 정도 부사나 명사를 한정하여 그 중 어떤 정도 부사가 어떠한 종류의 명사를 뒤에 가져 올 수 있는지를 알아본 결과 아래와 같이 3가지로 나눌 수 있다는 것을 알게 되었다.

① 'とても・はなはだ・すこぶる・たいへん・きわめて・非常に・わりに・ばかに・やけに・やや・もっと・ずっと・はるかに・いちだんと'는 어떤 종류의 명사도 수식을 할 수 없다.

② 'ずいぶん・結構・なかなか・多少・少し・ちょっと・かなり・相当・よほど'는 명사 종류와 상관없이 명사 수식을 할 수 있다.

③ 'いささか・いっそう'는 일부의 명사는 수식을 할 수 없다.

2) 'の'를 통해서 명사를 수식할 수 있는 정도 부사가 어떠한 의미를 가지고 명사를 수식하는지 알아보기 위하여 실체 사용하고 있는 문장을 예로 들면서 수식의 실태에 대해서 자세히 알아보았다. 그 결과 정도 부사는 수량적

척도를 수식하는 힘의 대소에 따라 아래와 같이 4가지로 분류 될 수 있다는 것을 알게 되었다.

① ‘ちょっと・少し’는 형용사적 특징을 보이면서 수량적 척도를 가늠하기 쉬운 명사군의 명사가 뒤에 붙을 경우에도 수량적 척도를 수식한다.
② ‘ずいぶん・結構・多少’는 수량적 척도를 가늠하기 쉬운 명사군의 명사가 뒤에 붙을 때에만 수량적 척도를 수식한다.
③ ‘かなり・相当・よほど’는 수량적 척도를 가늠하기 쉬운 명사군의 명사가 뒤에 붙을 때 수량적 척도를 수식할 수도 있지만 정도적 척도를 수식할 수도 있다.
④ ‘なかなか・いささか・いっそう’는 수량적 척도를 수식할 수 없다.

3) 얻어진 결과를 토대로 더욱 체계적인 고찰을 함으로 아래와 같은 결과를 얻게 되었다.

①정도 부사는 각각이 지니는 수량적 척도를 수식하는 힘과 정도적 척도를 수식하는 힘의 대소에 따라 순수 정도 부사로부터 양의 부사까지 이어지는 하나의 체계가 있다고 알게 되었다.
②그러한 체계가 있는 가운데에서 수량적 척도를 수식하는 힘을 지니는 정도 부사에는 ‘の’를 통해서 명사를 수식하는 기능이 있다. 또한 뒤에 붙는 명사에 대한 기능도 각각의 정도 부사가 지니는 수량적 척도를 수식하는 힘의 대소에 따라 달라진다는 것을 알게 되었다.

＜日本語抄録＞

「の」を介した程度副詞の名詞修飾に関する一考察

佐久間司郎

済州大學校　大學院　日語日文學科
指導教授　金勝漢

副詞は日本語教育の現場において後回しにされがちな学習項目の一つである。しかし、自然な日本語表現をするためには、状況に応じた適切な副詞の使用が不可欠である。昨今副詞に関する研究が盛んになってはきたが、まだまだ不十分な感は否めない。そのような背景において、後接する成分の程度を修飾する程度副詞もその一つに漏れない。

本研究は程度副詞の中でも「の」を介した名詞修飾に焦点を当てた。そしてどのような程度副詞が、どのような名詞を、どのような条件で、どのような意味を以って修飾するのかを明らかにし、さらにはその体系について言及することを目的とし研究を行った。その結果、以下のような結論を得た。

１）対象とする程度副詞・名詞を限定し、どのような程度副詞がどのような種類の名詞を後接できるかを調べる調査を行った。その結果、以下のように程度副詞は３つにグループ分けできることがわかった。

①「とても・はなはだ・すこぶる・たいへん・きわめて・非常に・わりに・ばかに・やけに・やや・もっと・ずっと・はるかに・いちだんと」は名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができない。
②「ずいぶん・結構・なかなか・多少・少し・ちょっと・かなり・相当・よほど」は名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができる。
③「いささか・いっそう」は一部の名詞は修飾できない。

２）「の」を介して名詞を修飾できる程度副詞がどのような意味をもって名詞を修飾しているかを調べるため、実際に使われている文章を例に挙げつつ、修飾の実態について細かく調べた。その結果、程度副詞は数量的尺度を修飾する力の大

小によって、以下のようにさらに４つに分類できることが分かった。

①「ちょっと・少し」は、形容詞的な特徴が見られ、かつ数量的尺度を想定しやすい名詞群の名詞が後接した場合も数量的尺度を修飾する。
②「ずいぶん・結構・多少」は、数量的尺度を想定しやすい名詞群の名詞が後接した場合のみ数量的尺度を修飾する。
③「かなり・相当・よほど」は、数量的尺度を想定しやすい名詞群の名詞が後接した場合、数量的尺度を修飾することもできるが、程度的尺度を修飾することもできる。
④「なかなか・いささか・いっそう」は、数量的尺度を修飾することができない。

３）得られた結果を元に、さらに体系的な考察を行い以下のような結果を得た。

①程度副詞はそれぞれが持つ数量的尺度を修飾する力と程度的尺度を修飾する力の大小によって、純粋程度の副詞から量の副詞にまでつながる一つの体系があることがわかった。
②そのような体系がある中で、数量的尺度を修飾する力を持っている程度副詞には「の」を介して名詞を修飾する働きがあり、また後接する名詞に対する働きもそれぞれの程度副詞の数量的尺度を修飾する力の大小によって変わってくるということがわかった。

目次

Ⅰ　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　程度副詞の名詞修飾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
２．１　程度副詞とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
２．２　程度副詞の名詞修飾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
２．２．１　程度副詞が直接名詞を修飾する形 ・・・・・・・・・・・・4
２．２．２　程度副詞が「の」を介して名詞修飾をする形 ・・・・・・5
２．３　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
２．３．１　佐野（1997）の研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
２．３．２　仁田（2002）の研究 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

Ⅲ　調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
３．１　調査対象とする程度副詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
３．２　調査対象とする名詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
３．３　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

Ⅳ　個別的考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
４．１　名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができる程度副詞・14
４．１．１　ずいぶん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
４．１．２　結構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
４．１．３　なかなか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
４．１．４　多少・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
４．１．５　少し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
４．１．６　ちょっと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
４．１．７　かなり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
４．１．８　相当・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
４．１．９　よほど・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
４．２　一部の名詞は修飾できない程度副詞・・・・・・・・・・・・・・29
４．２．１　いささか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
４．２．２　いっそう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

Ⅴ　体系的考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

Ⅵ　おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

参考文献

Ⅰ　はじめに

副詞は日本語教育の現場において後回しにされがちな学習項目の一つである。しかし、自然な日本語表現をするためには、状況に応じた適切な副詞の使用が不可欠である。昨今副詞に関する研究が盛んになってはきたが、まだまだ不十分な感は否めない。そのうちの一つに、程度を表す程度副詞と呼ばれるものがある。

程度副詞というと一般に、形容詞を中心とした用言の程度を修飾するものとして知られている。

（1）その部屋は少し広い。
（2）彼女はとてもきれいだ。
（3）かなり急いだ。

（1）から（3）の例はそれぞれ学校文法で言うところの形容詞、形容動詞、動詞といった用言を修飾した例である。

しかし程度副詞が修飾する成分が用言だけにとどまらないことは広く知られている。

（4）とてもゆっくり進む。
（5）非常にはっきりと答えた。
（6）かなり昔の話だ。
（7）もっと右に行け。

（4）（5）は副詞を、（6）（7）は名詞を修飾した例である。

このように程度副詞が修飾できる成分というのは多岐に渡るが、名詞修飾に目を向けて見ると、以下のような例も目にすることになる。

（8）彼女はかなりの美人だ。
（9）これはなかなかの車だ。
(10) ずいぶんの人がいる。

（8）（9）(10) は、程度副詞が「の」という助詞を介して名詞を修飾している例であり、自然な表現である。しかし全ての程度副詞、全ての名詞がそのような形をとれるわけではない。同じ名詞を修飾する場合でも、

(11) ＊とてもの美人だ。

のように不自然な文になってしまうこともある。また同様に、同じ程度副詞であっても、

（12）＊なかなかの昔だ。

のように、不自然な文になってしまうこともある。

こういったことから、程度副詞が「の」を介して名詞修飾をするためにはいくつかの条件的なものがあるのであろうと推察される。また、修飾をした際の意味に目を向けて見ると、（８）の「かなり」は「美人」という名詞の「程度」が高いということを表しているが、（10）は「人」の「数」が多いということを表している。つまり程度副詞と一言で言っても後接する名詞に対して様々な意味を以って修飾を施していることがわかる。

本研究はこのような「の」を介した程度副詞の名詞修飾に焦点を当てる。そして、どのような程度副詞が、どのような名詞を、どのような条件で、どのような意味を以って修飾するのかを明らかにし、さらにはその体系について言及することを目的とする。

Ⅱ　程度副詞の名詞修飾

２．１　程度副詞とは

程度副詞とはどのようなものであろうか。日本文法事典（1981）では程度副詞という項で、“それ自身は事物の属性状態をあらわすことなく、主として他の性質・情態の属性を修飾するもの”と規定されている。どこまでを程度副詞として認めるかといった点では研究者により異なりもあるが、程度副詞の基本的な定義はほぼこのように通説として認められているようである。

工藤（1983）でもこのような程度副詞の規定は一応“通説としてはほぼ安定しているかに見える”と認められている。しかし工藤はそれに加えて、程度副詞は“「種々の形容詞（いわゆる形容動詞を含めて言う）と組み合わさるのを基本とする」という形式―文法的特徴を持つ”という点も重要な要素であると論じ、つまり主として形容詞と組み合わさるという文法的特徴が程度副詞の規定に必要だとしている[1)]。

仁田（2002）では、上述した規定を認め、また工藤の研究に対しても“行き届いた研究”として評価した上で、程度副詞の基本的な働きを“形容詞に係り、それが有している程度性の度合いを規定するもの”としている。仁田が強調している点は、程度性という点である。程度性は、“属性（質）や状態が幅・度合い・スケールを帯びて、その属性や状態として成り立っていることから生じる”とあり、またその属性（質）・状態に関しては“定まった終端性・限界を持たない”ものとしている[2)]。

そういった“終端性・限界を含んでいない”という差のために、ある語は程度副詞の修飾を受けえるのであり、また“終端性・限界を含んでいる”ためにある語は程度副詞の修飾を受け得ないのだということである。そのようなことから、程度副詞の規定には程度性という要素も必要だとしている。

以上のことをまとめると、程度副詞というのは、「それ自身は事物の属性状態をあらわすことなく、主として形容詞に係り、それが有している程度性の度合いを修飾するもの」というような定義づけができるものと思われる。

---

1) 工藤浩（1983），「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』，明治書院，p177　参照。

2) 仁田義雄（2002），『新日本語文法選書3・副詞的表現の諸相』，くろしお出版，p147 参照。
「暗い」「新しい」などはその程度的尺度の限界点を持たない。現実には光量が０になれば「暗い」の限界点に至るし、「新しい」においてはできた瞬間がその限界点である。しかしこれらの語は“言語的意味の中に終端性・限界を含んでいない”のである。それを捉えているのは「真っ暗だ」「まっさらだ」という語である。

２．２　程度副詞の名詞修飾

程度副詞が名詞を修飾する形としては二つの形がある。一つは程度副詞が直接名詞を修飾する形であり、もう一つは助詞の「の」を介して名詞を修飾する形である。

２．２．１　程度副詞が直接名詞を修飾する形

連用修飾を基本とする副詞が名詞にかかることについては “その名詞の実質的意味にかかるのではなくて、その名詞のもつ時間的流動性や情態属性的な意味を限定するので、広義の連用修飾的陳述をもつ”という見方が一般的である[3)]。

日本文法事典（1981）では、「程度副詞」の項で“程度副詞はある種の体言やある種の副詞を修飾する”として、具体的な例が挙げられている。

（13）もっと東だ／少し右へ寄れ／ずっと昔のことだ

そしてその解説として、“これらの体言は、ある点を基準として時間的・空間的にある広がりをもっているので、その程度を示す場合に、この程度副詞がそれを修飾し得るものと見られる”という記述がある。また日本文法大辞典（1971）にも同じく程度副詞の名詞修飾について、“方向・場所・時間・数量など、空間的、時間的にある広がりをもった体言の上についてその広がりの程度を限定することがある”と記述されている。これは通説としてよく知られている。

仁田（2002）は、そういったいわゆる“相対名詞[4)]”が程度副詞の修飾を受けえるということを認めた上で、“程度副詞に修飾・限定される名詞は、相対名詞だけではない”と、例を挙げている。

（14）たいへんに創意工夫の兵隊／だいぶ高みになっている／かなり疑問だ／少しピンボケで

これらの修飾を受けている名詞「創意工夫」「高み」「疑問」「ピンボケ」などは“相対名詞ではないが、程度副詞を受けている”とし、“名詞の語彙的意味があり様や状態を表すものであることによって、程度性を帯びている名詞である”と続けている。

---

3) 岡村和江（1988），「副詞および連体詞の境界―詞・辞分類との関係」松村明編『講座日本語の文法３品詞各論』，明治書院, p248　参照。

4) 寺村秀夫（1968），「日本語名詞の下位分類」『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』，くろしお出版 p14 参照。
名詞の中には“「時間的・空間的な相対的位置関係」を表すものがかなり多く”あるとしており、その典型として“前、後、中、右、左、上、下”といった語を挙げている。「相対名詞」とはそのような名詞を指す。

つまり程度性を帯びている名詞は、程度副詞の修飾を受け得るということである。

２．２．２　程度副詞が「の」を介して名詞修飾をする形

程度副詞が名詞修飾をする形のもう一つが「の」を介して修飾する形である。これに対する言及は直接名詞を修飾する場合に比べて極めて数が少ない。例えば日本文法事典（1981）の程度副詞の項を見てみると、それに触れてはいるが“また、「の」を伴って体言のように働くことがある”という記述のみにとどまっているし、日本文法大辞典（1971）でも“「の」を伴って連体修飾語になることもある”という記述のみである。また、程度副詞と共起する名詞について日本語と韓国語の対照研究を行った金（2005）でも、「の」を介する名詞修飾に関してはそういった使い方があると指摘するにとどまり、具体的な考察は以後の課題として残されている[5)]。

２．３　先行研究

２．２での指摘のように十分な研究がない中で、佐野（1997）[6)]の研究、また２．１でも触れた仁田（2002）の研究は比較的深い考察がなされており、注目に値する。本研究を進めていく上でも重要な先行研究であるため、以下に簡単に紹介する。

２．３．１　佐野（1997）の研究

佐野（1997）は程度副詞の名詞修飾について、後接する名詞の性格の差に主眼をおいて研究を行ったものである。佐野は程度副詞の名詞修飾について、“程度副詞は、名詞と共起するとき、一般に「の」を介して結びつく”という立場から論を始め、後接する名詞を以下の三つに分けて考察を行った。

①「の」を介さずに程度副詞と共起する名詞
　(かなり前だ／*かなりの前だ)
②「の」を介しても介さなくても程度副詞と共起する名詞
　(かなり美人だ／かなりの美人だ)
③「の」を介してのみ程度副詞と共起する名詞
　(*かなり車だ／かなりの車だ)

そして、以下のような結論を得ている。

---

5) 金賢珍（2005），「日韓両言語の程度副詞と共起する名詞について ―「程度大」を表わす語を中心に―」『多元文化』５，名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻，p180　参照。
6) 佐野由紀子（1997），「程度副詞の名詞修飾について」『日本学報』16，大阪大学

①「の」を介さずに程度副詞と共起する名詞

昔から指摘されてきた相対名詞はもちろんこのグループに属するが、それ以外にも「旧式、新式、旧型、新型、細目、太目…」などの語もこのグループに属する。これらは“形容詞的要素を前項とし、かつ、句を包摂しうる接辞的要素を後項とする名詞[6)]”であり、程度副詞は“意味的に前項の形容詞的要素のみを修飾する”ため直接名詞を修飾することが可能である。

②「の」を介しても介さなくても程度副詞と共起する名詞

「美人・勉強家・努力家・恥ずかしがりや・照れ屋・嘘つき・悪・悪人・好青年・薄味…」などがこのグループに属する。これらの名詞は名詞でありながら、形容詞的な特徴がある[7)]。そしてそういった形容詞的な特徴を有していることが、本来用言を修飾するのが基本であるはずの程度副詞が「の」を介さずに名詞を修飾することを可能にするとしている。

③「の」を介してのみ程度副詞と共起する名詞

①②以外の名詞は全てこのグループに属する。そして“その中の大部分と「かなりの」「相当の」等とが共起したとき、「かなりの」「相当の」等は（数）量を表す”“ただし、（数）量を想定できない一部の名詞（「深さ、うれしさ、喜び、熱」等）については、「かなりの」「相当の」と共起したときも、程度を表す解釈となる”としている。例としては以下の通りである。

（15）かなりの｛机／服／犬／車／雨｝（数量）

（16）かなりの｛深さ／美しさ／熱｝（程度）

この研究から「の」を介した程度副詞の名詞修飾について導き出せることは次の二点である。

---

6) 佐野（1997）p125　参照。
例えば「かなり旧式」という語の修飾関係を考えた場合、形態的には「[かなり][旧式]」というように、「かなり」が「旧式」という語を修飾しているとしか見ることができないが、意味的に考えると「[かなり旧]式」のように見ることができ、「かなり」は「旧式」の「旧」という部分を修飾しているのだと考えることができる。

7) 佐野（1997）p126～p127　参照。
形容詞特徴と考えられるものはいくつかある。①他の名詞に比べて、連体で「～な」の形を取りやすい。（美人な／薄味な／*机な／*本な）②意味的に、形容詞と同様、属性を表しうる。③程度副詞と「の」を介さずに共起した場合連体修飾を受けえるのに対し、「の」を介さなかった場合は連体修飾語を受けることができない。（「あの[かなりの美人]だ」は言えるが、「*あの[かなり美人]だ」は言えない。これは「の」を介さない場合には「美人」という語が名詞として機能せず、形容詞的に働いていることを示す）

①修飾する際の意味には「数量」「程度」がある。
②修飾する際の意味は後接する名詞の性格によっても変わってくる。

しかしながらこの研究では、考察対象の程度副詞が「かなり」「相当」「なかなか」という三種類に絞られており十分とは言えない。特に「少し」「ちょっと」においては“扱わない”と断言されている。また、程度副詞の名詞修飾に関して名詞の基準によって場合分けをしているのを見ると明らかなように、副詞側に対する言及が少ない。程度副詞の名詞修飾の体系的考察としては目を見張るものがあるが、「の」を介した修飾一つに限るともう少し詳しく見ていく必要があるのではないかと思われる。

２．３．２　仁田（2002）の研究

これは程度副詞だけにとどまらず、副詞についてかなり広範に研究してあるものだが、程度副詞の「の」を介した名詞修飾についても若干触れられている。

仁田は程度副詞と量の副詞（「たくさん」「いっぱい」等）を合わせて“程度量の副詞”と名付け考察しているのだが、その程度量の副詞をそれぞれが持つ機能により“純粋程度の副詞”“量程度の副詞”“量の副詞”の３種類に分けている。その機能分担を図示すると以下のようになる（図１）。

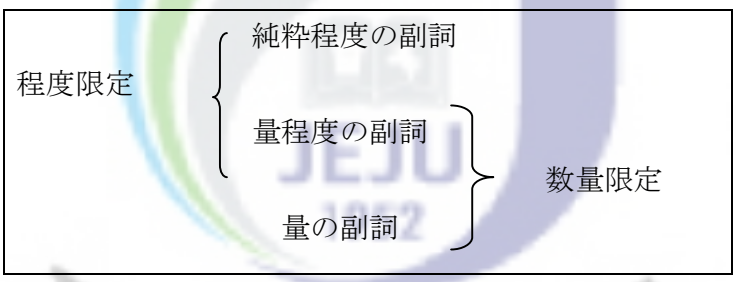

図１：仁田（2002）における程度量の副詞の機能分担

本研究で取り扱っている「程度副詞」は、この分類においては、「純粋程度の副詞」と「量程度の副詞」を合わせたものをさす[8]。「純粋程度の副詞」とは純粋に程度的な尺度のみを修飾する「非常に」「とても」「すこぶる」「たいそう」などの副詞であり、「量程度の副詞」とは程度的な尺度も、量的な尺度も修飾できる「よほど」「ずいぶん」「かなり」「相当」などの副詞のことである。

そして「の」を介した名詞修飾に関しては、「純粋程度の副詞」は「の」を介した

[8] 仁田（2002）p163　参照。
「純粋程度の副詞」と「量程度の副詞」の差は次のようなテストフレームにより識別できる。“お酒を[X]飲んだ”“[X]歩いた”などである。程度限定を行うことができ、かつこの［X］に入れることが可能な程度副詞が「量程度の副詞」で、ここに入れると文章に逸脱性が出てしまうものが「純粋程度の副詞」である。「たっぷり」などの副詞も[X]に入れることが可能だが、程度限定を行いえないことから量程度の副詞でないことがわかる。

名詞修飾ができず、「量程度の副詞」は「の」を介した名詞修飾が可能なものもあるとしている。

(17) ＊{非常に／とても／すこぶる／たいそう}の＋名詞
(18)　{ずいぶん／かなり／相当／ちょっと}の＋名詞

また、「量の副詞」に関しても、

(19) {たくさん／いっぱい／たっぷり}の＋名詞

のように「の」を介して名詞を修飾できる語が少なくない。

これを仁田はその程度副詞の「名詞性の高さ」によるとしている。「純粋程度の副詞」「量程度の副詞」「量の副詞」、この順番で名詞性が高くなっていき、その名詞性の高さゆえに助詞の「の」を後接し、名詞を修飾することが可能なのだとしている。またこの名詞性の高さは副詞の表す意味の抽象性とも関わっており、“抽象性が低い方が名詞的に捉えやすくなる”ともしている。つまり「程度」は「量」に比べて抽象性が高く、具体性が低いのだということである。

以上のように仁田（2002）では、「の」を介した程度副詞の名詞修飾の副詞側の条件について詳しく論じられている。しかし、全体を見渡した時の俯瞰図的なもの提示するにとどまっており、程度副詞一つ一つに対する個別的な考察や、後接する名詞側の条件については述べられていない。

Ⅲ　調査

２．３の先行研究でも触れたように、「の」を介した程度副詞の名詞修飾については、考察が不十分であることが分かった。これについて深く掘り下げていくのが本研究の目的であるが、まずその第一段階として「の」を介した名詞修飾の全体像を把握する必要があると思われる。この章ではそのための調査を行うこととする。この調査はどのような程度副詞が「の」を介した名詞修飾をすることが可能なのか、全体的にどのような傾向があるかを調べるものである。

３．１　調査対象とする程度副詞

程度副詞が何かということは上述したが、程度副詞は語彙的広がりを持った存在であり、他の品詞や単語類からの移行や参入が少なくない。

例えば工藤（1983）は、“程度副詞には、斬新で効果的な表現が求められる”などの理由から、他品詞からの移行が多いとしている。そして「すごく／ひどく／非常に／大変（に）／極めて／至って」などをほぼ程度副詞に移行し終えたと思われるものの例としてあげたりもしている。しかし、研究者によっては「すごく」を形容詞の活用形として捉えたりすることもあり、どこからどこまでが程度副詞かという線を明確に引くことは難しい[9)]。

渡辺（1990）では、程度副詞を体系的に区分するということが行われている[10)]が、そこで語例としてあげられた語（表１）を本研究の対象とすることにする。理由としては、それらの程度副詞は“程度副詞らしい程度副詞”とされており、程度副詞として区分されることに疑いの挟みようがないと思われるということからである。しかし、佐野（1997）の研究で取り上げられている“相当”がこの表にはないようなので、これも渡辺の程度副詞の語例に加える。

---

9) 小野（1997）は、「いたくがっかりした」「おそろしくうまい蕎麦屋がある」といった例を挙げ、「いたく」は独立した項目として辞書に載っているが、「おそろしく」は形容詞の「おそろしい」の一つの用法として説明されており副詞として認定している辞書はないと指摘し、問題提起をしている。

10) 渡辺実（1990），「程度副詞の体系」『国文学論集』23，上智大学国文学会　参照。
これは比較文で使われるかどうか、プラス評価かマイナス評価か、その程度性が大か小か、などといった観点から程度副詞を体系的に分類することを試みたものである。そして「とても」に代表される「とても類」、「結構」に代表される「結構類」、「多少類」、「もっと類」といった四類に分類されるという結論を得た。

表１：渡辺（1990）における程度副詞の語例

とても、はなはだ、すこぶる、たいへん、きわめて、ひじょうに、ずいぶん、結構、なかなか、わりに、ばかに、やけに、多少、少し、ちょっと、やや、いささか、かなり、もっと、ずっと、よほど、いっそう、はるかに、いちだんと、相当

３．２　調査対象とする名詞

２．３．１で触れたように「の」を介した程度副詞の名詞修飾では、程度副詞側の性格だけではなく、後接する名詞の性格によっても修飾した際の意味が変わってくることがわかっている。そのため、調査する名詞もある程度定めなければならない。しかし調査対象の名詞を少数に限ってしまっては、限定的な調査になってしまうため、ある程度幅を持たせる必要がある。そこで調査対象とする名詞をグループに分けることにする。調査としては具体的な名詞を挙げ、その名詞を以ってそれぞれのグループを代表させる。しかし性格上潜在的にそのグループに所属するだろうと思われる名詞は全てそのグループに含まれることとする。その例は佐野（1997）において「の」を介した名詞修飾が成立するための名詞としてあげられているものとする。しかし一つの研究で挙げられた語のみを例としてしまっては、客観性が乏しくなってしまう。そこで寺村（1968）、金（2005）において名詞の例として挙げられている名詞もこれに加えることとする。

名詞のグループ分けであるが、佐野（1997）を見ると「の」を介した名詞修飾を成立させ得る名詞群は三つあるのがわかる。すなわち、

①幾つかの点で形容詞的な特徴が見られる名詞群
　（勉強家・努力家・恥ずかしがりや・照れ屋など）
②数量的尺度を想定しやすい名詞群
　（机・服・犬・車など）
③程度的な尺度を想定しやすい名詞群
　（深さ・大きさ・長さ・太さなど）

の３グループである。しかし本研究では、分類基準の一貫性を図るために①をさらに「数量的尺度を想定しやすい名詞群」と「数量的尺度を想定しにくい名詞群（程度的尺度の方が想定しやすい名詞群）」の二つに分けることにし[11]（図２）、便宜上図のようにそれぞれＡ群、Ｂ群、Ｃ群、Ｄ群と呼ぶことにした。またグループ分け

[11] Ａ群とＢ群は数量的尺度が想定しやすいかどうかで分けたが、その基準は「[　] がたくさんいる（ある）」「[　] が一人（一つ）いる（ある）」の[　]に入るかどうかで振り分けた。

した名詞を表にして示す[12]（表２）。

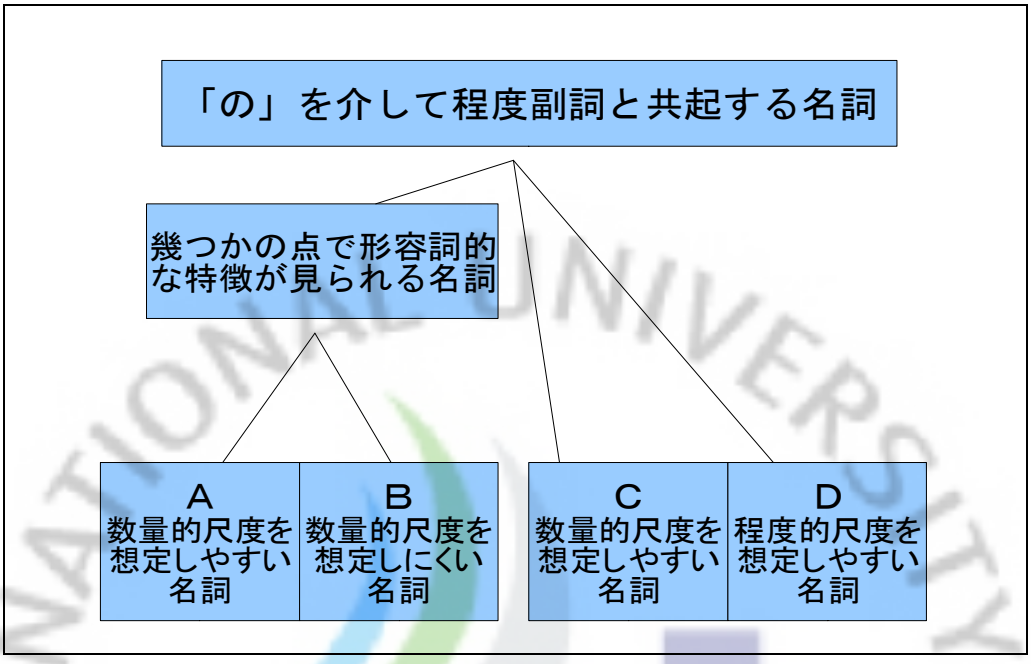

図２：名詞のグループ分け

表２：調査対象とした名詞の例[13]

A　形容詞的な特徴が見られ、かつ数量的尺度を想定しやすい名詞群

勉強家・努力家・恥ずかしがりや・照れ屋・嘘つき・悪・悪人・好青年
大物・大男・近道・食いしん坊・甘えん坊・ナルシスト・やり手・お嬢さん
育ち変人・美男子・田舎者・ご馳走・安物・美人・人格者・怠け者・金持ち
・疑問

B　形容詞的な特徴が見られ、かつ数量的尺度を想定しにくい名詞群

高学歴・早起き・短足・大都市・大金・大損・高望み・重荷・薄味・早足・
遠回り・長生き・薄給・人気・晩婚・好評・負担

C　数量的尺度を想定しやすい名詞群

机・服・犬・車・雨・椅子・本・葉・紙・雲・鳥・店・家・子犬・新車
軽石・駅・教室・箱・写真

---

12) A・B群の名詞はもともとどちらとも程度的尺度を想定しやすいため、必然的にB群は程度的尺度を想定しやすい名詞となる。そのためA群とC群、B群とD群の差は形容詞的な特徴が見られるかどうかという点のみである。

13) 寺村（1968）からは「駅」「教室」「箱」「写真」「買物」「想像」「疑い」「匂い」「病気」を、金（2005）からは「疑問」「好評」「金持ち」「怠け者」「負担」「人格者」「晩婚」「勉強」を用いた。

D　程度的尺度を想定しやすい名詞群 深さ・大きさ・長さ・太さ・明るさ・美しさ・喜び・悲しみ・痛み うれしさ・熱・美貌・力・値段・腕前・スピード・強風・豪雨・規模・出来 待遇・暮らし・働きぶり・善・悪・買物・勉強・想像・疑い・匂い・病気

３．３　調査結果

３．１と３．２で対象とした程度副詞と名詞がそれぞれ修飾・被修飾が可能かどうかを調べる調査を行い、結果を表にした（表３）。程度副詞が「の」を介してそのグループの名詞を修飾することが可能だと思われるものには〇印、修飾ができないと思われるものには×印をつけた。

表３：調査結果

		A	B	C	D			A	B	C	D
①	とても	×	×	×	×	②	ずいぶん	〇	〇	〇	〇
	はなはだ	×	×	×	×		結構	〇	〇	〇	〇
	すこぶる	×	×	×	×		なかなか	〇	〇	〇	〇
	たいへん	×	×	×	×		多少	〇	〇	〇	〇
	きわめて	×	×	×	×		少し	〇	〇	〇	〇
	非常に	×	×	×	×		ちょっと	〇	〇	〇	〇
	わりに	×	×	×	×		かなり	〇	〇	〇	〇
	ばかに	×	×	×	×		相当	〇	〇	〇	〇
	やけに	×	×	×	×		よほど	〇	〇	〇	〇
	やや	×	×	×	×	③	いささか	〇	〇	×	〇
	もっと	×	×	×	×		いっそう	〇	〇	×	〇
	ずっと	×	×	×	×						
	はるかに	×	×	×	×						
	いちだんと	×	×	×	×						

表３から明らかなように、「の」を介した名詞修飾が可能な程度副詞においては３つのケースがあることがわかった。

①名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができない程度副詞

②名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができる程度副詞
③一部の名詞は修飾できない程度副詞

２．３．２でも述べたが、量を表すことのできる程度副詞の中には「の」を介して名詞を修飾できるものがあると仁田（2002）は指摘している。①に当てはまるもの、すなわち「の」を介した名詞修飾の形を全くとることができないものは量を表す機能がないものがほとんどである。逆に②③に当てはまるもの、すなわち「の」を介した名詞修飾が可能な程度副詞のほとんどは、量を表す機能があるものである[14)]。しかし、「いっそう」などは量を表すことができないにも関わらず「の」を介した名詞修飾が可能であり、仁田の指摘が全面的に適用されるものでないことも同時にわかる。

また、②と③の差を考えてみても、この調査だけではただＣ群の名詞が後接したときは一方が修飾可能であり、もう一方が不可能であるといったことがわかるだけで、その差がどういったものによるものかという答えを出すのは難しい。

そういった①②③の差を解明するために、Ⅳでは各程度副詞の意味について個別に見ていく。２．３．１の佐野（1997）の研究のところでも挙げたように、「の」を介した程度副詞の名詞修飾においては「数量」「程度」という意味があることが知られている。そのような修飾する際の意味を明らかにすることによって、「の」を介した程度副詞の名詞修飾の全体像が把握できると考えるからである。

14) 「わりに」などは量を表す機能もあるが、語構造の問題から「の」を介した修飾ができない。それは例えば形容詞から転移した「すごく」という副詞が語法上の問題から「*すごくの」という形をとれないことと平行的な関係を示すものである。

Ⅳ　個別的考察

このⅣでは、Ⅲで述べたように、「の」を介して程度副詞が名詞修飾をする際の意味について細かく見ていくこととする。ここでは、名詞をどのような意味を以って修飾しているかのみを問題にし、程度性の内実の異なりは問題としない。

例文についてはより多くの例文に当たれるようにインターネットの検索エンジンであるグーグルを利用した。ある特定の検索語彙をキーワードにして検索し、出てきた文章を例文として提示する。しかし単に、「そのような用例がある」ということのみで例文として採用するのではなく、一般に許容されるであろうと思われる例文を採用するようにした。

４．１　名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができる程度副詞

ここでは、３．３の調査において②に該当する程度副詞、つまり「名詞の種類を問わず名詞修飾をとることができる程度副詞」について一つずつ見ていくこととする。

４．１．１　ずいぶん

Ａ群の名詞が後接した場合である。

（20）昔はさぞかしずいぶんの美人だったろうと思ったな。
（21）あの人はずいぶんのお金持ちだそうだ。

用例は豊富とは言えないが（20）（21）のような例が見つかった。「ずいぶん」が「美人」、「お金持ち」の度合い、つまり程度的な尺度を修飾していることがわかる。Ａ群の名詞は数量的な尺度も想定できる名詞群であるが、数量的尺度を修飾した例は見つからなかった。

Ｂ群の名詞が後接する場合はどうであろうか。

（22）広い駐車場が埋まっていてずいぶんの人気だ。
（23）会社帰りっていうには、ずいぶんの遠回りでした。

これも用例は豊富とは言えないが、（22）（23）のような例があった。（22）と（23）はそれぞれ「人気」「遠回り」の程度的な尺度を修飾している。

次にＣ群の名詞が後接した場合である。

（24）電車にもずいぶんの人が乗っている。
（25）帰りにずいぶんの車、バイクとすれ違いました。
（26）この４月の１ヶ月で、ずいぶんの本を読んだことになる。

これらの例を見ると（24）は「人」の数、（25）は「車」、「バイク」の数、（26）は「本」の数が多いということを表現していることがわかる。ということから「ずいぶん」に数量的尺度を想定しやすい名詞が後接した場合には、その数量的な尺度を修飾することがわかる。

では、最後にＤ群の名詞の場合はどうか。

（27）みなとみらい地区には、ずいぶんの規模の駐車場があります。
（28）岩牡蠣、ずいぶんの大きさであり運ばれてきたときには目が点になった。

（27）が「規模」の程度を、（28）が「大きさ」の程度を修飾したものであることは自明であろう。

「ずいぶん」の「の」を介した名詞修飾の機能をまとめると以下のようになる。

	A	B	C	D
ずいぶん	程度	程度	数量	程度

４．１．２　結構

Ａ群の名詞が後接する場合を見てみる。

（29）一人は結構の美人で、もう一人はおばさんだった。
（30）彼はボーっとしてるようで結構のやり手ですよ。

（29）（30）も「結構」が「の」を介して「美人」「やり手」といった名詞の程度的な尺度を修飾しているのがわかる。「ずいぶん」と同様、数量的尺度を修飾した例は見当たらなかった。

次にＢ群の名詞が後接する場合である。

（31）遠くの本屋さんまでの運賃も結構の負担なのに計画もなくきてしまった。
（32）これが峠を越えなければならず、結構の遠回りであった。

「結構」が（31）では「負担」の程度、（32）では「遠回り」の程度を修飾している。

Ｃ群の名詞が後接する場合はどうであろうか。

（33）平日にもかかわらず結構の車が止まっていました。
（34）実際行ってみると結構の人が待っていました。

（33）（34）も「ずいぶん」と同様、数量的尺度を修飾しているのがわかる。（33）では「車」の数を、（34）では「人」の数を「結構」が修飾している。
Ｄ群の名詞が後ろにつく場合はどうなるか。

（35）小さいものを想像していましたが、結構の大きさでびっくりしました。
（36）表通りのペンションは共同シャワーでも結構の値段です。

（35）（36）のような例が見られた。これらの場合も「ずいぶん」と同様、名詞の程度的尺度を修飾していることがわかる。
「結構」の機能をまとめる。

	A	B	C	D
結構	程度	程度	数量	程度

４．１．３　なかなか

Ａ群の名詞が後接する場合を見てみる。

（37）袴田オーナーを先頭に、みんななかなかの勉強家ですから、すごく刺激になります。
（38）今のマスターもなかなかの好青年で美味いカクテルも作る。

「なかなか」が（37）では「勉強家」の程度を、（38）では「好青年」の程度を表しているようである。
Ｂ群の名詞が後接した場合はどうか。

（39）カナダの都市は、ほかの国の都市と比べてもなかなかの大都市であります。
（40）午前10時発なので、成田に前泊といえどもなかなかの早起きでございます。

（39）（40）共に程度を表していると言えそうである。
ではＣ群の場合である。

（41）シルバー 4ドアのスカイライン、なかなかの車です。
（42）ダビンチ自身もなかなかの音楽家だったという話だが…

「ずいぶん」や「結構」ではＣ群の名詞が後接した際には数量的な尺度を修飾していたが、この場合は違うようである。（41）では「車」の程度を、（42）では「音楽家」の程度を修飾しているように思われる。しかしこの「なかなか」の意味は他の程度副詞とは区別される「プラス評価」として解釈される。（41）は「車」の価値的な度合いを「なかなか」という語で「プラス評価」し、（42）はダビンチの「音楽家」の能力やレベルの程度を「プラス評価」しているのである。そのため「評価」という尺度を想定しにくい名詞（「ゴミ」、「割り箸」など）や人間が評価を下しにくい名詞（「死」、「太陽」）には「なかなか」はつきにくい[15)]。

そう考えると、（37）～（40）で見たＡ・Ｂ群の名詞が後接した場合も「程度」という意味を以って修飾を行っていると考えるよりも「評価」という意味を以って修飾を行っていると考えるのが妥当のような気もするが、（40）などは「評価」としてしまうと少し問題が出てきそうである。（40）の「早起き」は確かに「の」を介して「なかなか」と共起しているが、「早起き」という名詞に「評価」という評価軸を取り入れるのはいささか無理があるように思われる。また、そのほかにも

（43）しかしこれは英語すらままならぬ僕にとってなかなかの重荷である。
（44）妻には毎日の弁当はなかなかの負担だそうだ。

のように、マイナス的な意味を持つ名詞を中心に、このような例も見られ、（43）（44）がプラス評価という意味を以って修飾していると言うのは少し難しい。では、Ａ・Ｂ群の名詞が後接する場合は、やはり「程度」と解釈するのが妥当であろうか。

「なかなか」には「評価」と「程度」という二つの要素があり、文脈によって「評価」の意味が立つこともあれば、「程度」の意味が立つことがあるという指摘がある[16)]。つまり共起する成分の性格によって変わってくるというのである。そのように２種類の意味を併せ持っていると考えると今まで見てきた疑問が解けてくる。「なかなか」にＡ・Ｂ群の名詞が後接した場合は、これらが形容詞的特徴を持った名詞であるため、「なかなか」が「程度」的に修飾する機能を表す。しかしＣ群の名詞は程度的尺度が想定しにくい名詞であるため、「評価」という機能が浮かんでくるのである。

ではＤ群の名詞の場合はどうであろうか。

---

15) 佐野（1997）p129　参照。
16) 松田明子（2005）,『肯定・否定表現における日本語程度副詞について』九州大学文学部人文学科言語学・応用言語学専攻卒業論文, p14 参照。

（45）なかなかの腕前とお見受けいたしました。
（46）なかなかの出来です。

（45）と（46）は「なかなか」がそれぞれ「腕前」「出来」を評価しているようにも見えるし、程度的な尺度の修飾を行っているようにも見える。それはこれらの名詞自体が「程度が大きくなる方向」と「評価が高くなる方向」が一致しているからであろう。しかし例えば

（47）なかなかの深さ

というような表現だけでは、それを「評価」としていいのか「程度」とすればいいのか、判断がつかない。場合によってはある程度の深さがあることが評価されることもあるだろうし、ただ単に深さの程度を修飾したものであると見ることもできるからである。「なかなか」にＣ群の名詞が後接した場合には「評価」という意味が付与されると述べたが、それはＣ群の名詞に程度的な尺度を想定するのが難しいからである。Ｄ群の名詞は程度的な尺度が想定しやすい名詞である。とすれば、後接する名詞によって「評価」と「程度」といった二つの意味が付与されるというのも十分想定できることである。つまり、評価という尺度が想定できる名詞が後接する場合は「評価」、想定できない名詞は「程度」という具合である。
「なかなかの」の機能をまとめる。

	A	B	C	D
なかなか	程度	程度	評価	程度・評価

４．１．４　多少

Ａ群の名詞が後接する場合である。

（48）多少の美人でも年をとっていれば、美人度で劣っている若い女にはかなわない。
（49）多少のお金持ちであればモテた時代。

（48）（49）も程度的尺度を修飾していることがわかる。
Ｂ群の名詞が後接した場合も、

（50）多少の長生きよりも、今を楽しく生きたいと私は思います。
（51）だから、多少の高望みはご了承ください。

（50）（51）もどうやら後接する名詞の程度を修飾する表現であろうことがわかる。（50）では「長生き」の度合い、（51）では「高望み」の度合いを修飾している。
では続いてＣ群の名詞が後接する場合である。

（52）朝５時前だと言うのに、多少の車が見られました。
（53）今までに多少の本は読んできた。

（52）（53）もそれぞれに後接する名詞の数量的尺度を修飾していることは明らかである。
ではＤ群の場合であるが、

（54）レインブーツなので、多少の大きさは気にならないと思いますが…。
（55）多少の規模を持ち長期継続を目指すのであれば、有給で常駐の有能な人材が必要で…

（54）（55）も程度的尺度を修飾するようである。（54）は「大きさ」の程度、（55）では「規模」の程度を修飾している。
「多少の」の機能をまとめる。

	A	B	C	D
多少	程度	程度	数量	程度

４．１．５　少し

「少し」は「多少」と同様に、小さい程度や数量を表す表現であるが、細部を見ていくと必ずしも同じとは言えない部分が出てくる。
まず、Ａ群の名詞を後接させる場合である。「多少」の際に用いた例文（48）の「多少」を「少し」に入れ替えてみると

（48）a　?少しの美人でも年をとっていれば、美人度で劣っている若い女にはかなわない。

となり、この表現は許容しにくい。だが（56）のような例はどうだろうか。

（56）少しの美人がいるだけで、会社の雰囲気は全く違うように見える。

（56）　が（48a）と違うのは、「少し」が数量的な修飾をしている点である。どうやら数量的にであれば、「少しの美人」という表現も許容されてよいようである。では

「少し」にA群の名詞が後接した場合は数量を表すのであろうかと考えられる。他の例を見てみると、

（57）大人数の中で少しのやり手がいる。
（58）少しの悪人の為に、多くの善人まで犠牲にしてはいけない

のような例が散見された。（57）（58）の「少し」が「やり手」「悪人」の数量的尺度を修飾しているのは明らかである。

ではB群の名詞が後接した場合はどうか。A群の場合と同様（50）の「多少」を「少し」に入れ替えてみると、

（50）a　少しの長生きよりも、今を楽しく生きたいと私は思います。

となる。（50a）は（48a）とは違い、自然さは高い。そして同時に、これは数量ではなく「長生き」の程度を修飾していることもわかる。次のような例もある。

（59）少しの早起きで満員電車も座って通勤が出来ます。
（60）ほんの少しの重荷を過剰に受け止めて身動きとれないやつもいるぞ。

（59）（60）は後接する名詞の程度的尺度を修飾した表現である。このように程度的尺度を修飾した表現も多く存在する。

（56）～（60）の例より、A・B群の名詞は同じ形容詞的特徴を有した名詞ということで共通点があるが、A群の名詞のように数量的尺度を想定しやすい名詞の場合は、その形容詞的特徴よりも数量的尺度という力に引っ張られるようである。（56）～（60）のA・B群の修飾の例から見て、「少し」が常に「数量を表す」と断言できないことは明らかである[17]。

では次にC群の名詞が後接した場合はどうであろうか。

（61）三叉路になった峠の少し先の路肩には少しの車が駐車してあった。
（62）少しの雨なら，木の葉をぬらすだけで，地面まではなかなか落ちてきません。

となり、後接する名詞の数量的尺度を修飾するようである。（61）は「車」の数、（62）は「雨」の量を修飾している。

では、D群の名詞が修飾した場合はどうか。

---

[17] 佐野（1997）では「の」を介した名詞修飾において“常に程度ではなく「数量」を表す”ということから「少し」と「ちょっと」を考察対象に含めていない。

（63）我が家を少しの規模なのですが増築しています。
（64）こちらはストラップを調節できますので少しの大きさはカバーできます。

（63）（64）のように、程度的な尺度の修飾もできそうである。（63）は規模の程度、（64）は大きさの程度を修飾している。これも佐野（1997）の指摘と異なるものである。「少し」は常に数量を修飾するのではなく、後接する名詞の種類によって修飾機能が変わるのである。

ただこれまで見てきた他の程度副詞とは違って、A群の名詞を修飾する際に数量的尺度を修飾していることから、数量を表す力が強いとは言えそうである。

「少し」の機能をまとめると次の通りである。

	A	B	C	D
少し	数量	程度	数量	程度

４．１．６　ちょっと

「多少」「少し」と同じく、小さい程度を表す「ちょっと」であるが、やはりこれもそれなりの特性があるようである。まず、A群の名詞を修飾する場合である。

（65）ちょっとの金持ちと、ものすごいたくさんの貧乏人。

（65）のような例が見つかったが、そのほかにはほとんど実例は見つからなかった。（65）は「ちょっと」が「金持ち」の数量的尺度を修飾している。２．３．１でも述べたが、佐野(1997)は「ちょっと」を「数量を表す」という理由から考察に含めなかった。しかしながらこの調査においては「ちょっとの＋A群の名詞（数量的尺度を想定しやすい)」という形が非常に少なかった。これは一見矛盾しているようにも見える。

B群の名詞が後接した場合である。

（66）ご滞在の際はちょっとの早起きでどうぞ特別の朝を手に入れて下さい。
（67）バルセロナのタクシーは安いんで、ちょっとの遠回りくらいじゃ財布は痛みません。

（66）は「ちょっと」が「早起き」の度合いを、（67）は「遠回り」の度合いを、つまり程度的尺度を修飾していると言える。しかし、B群の名詞が後接する形もそれほど豊富に見つからなかった。

翻ってC群の名詞が後接する場合はどうであろうか。同じ小さい程度を表す「多

少」においては、

（52）朝５時前だと言うのに、多少の車が見られました。

のように数量的な解釈をするものが比較的たくさん見られたのに対して、ここを「ちょっと」に入れ替えてみると、

（52）a　?朝５時前だと言うのに、ちょっとの車が見られました。

となり、非文とまではいかないものの若干不自然さがあるものが多い。しかし、「ちょっと」が数量的な尺度を修飾している例もないわけではない。

（68）ちょっとのお菓子でちょっぴりしあわせ。

（68）は自然な文として成り立っている。「ちょっと」が数量を表すときには、どうやら名詞によって自然なものも、不自然なものもあるようである。それを調べるために、「ちょっと」に「の」を介して後接し、かつ数量の意味を表すＣ群の名詞にどんなものがあるのか、近い範囲で調べてみると、

（69）お菓子、お酒、砂糖、スパイス、雨、油、塩

のような単語が見つかった。これらに共通することは、「の」を介して「ちょっと」に後接すると数量を表すのだが、特に数量のうちの「量」という概念を表すということである。「お菓子」は数として捉えることもできるかもしれないが、「ちょっと」に後接する場合には（68）のように、量として捉える方が妥当であろう。

ということから、「ちょっと」の後に数量的な尺度を想定しやすいＣ群の名詞がきた場合には数量的尺度を修飾する機能を表すが、特にその中でも量的な尺度を修飾する場合が多いと考えることができる。

そのように考えると、（65）の例の提示のみにとどまり、深く言及しなかったＡ群の名詞が後接する際の疑問も解けてくる。「ちょっと」自身が数量を表す意味を持つにも関らず、数量的尺度を想定しやすいＡ群の名詞と共起した例があまり見当たらなかったのは、「ちょっと」が数量の中でも特に量的尺度を修飾するのに特化した語だからではないだろうか。だから例えば「美人」「努力家」「恥ずかしがりや」といったような、数量という概念の中でもどちらかと言えば「数」の方の尺度を想定しやすい名詞を修飾した例があまり見られなかったのではないだろうか。次の例を見るとわかりやすい。

（70）ちょっとのご馳走とケーキを食べるって感じでした。

（70）は、「ちょっと」が「ご馳走」という語の程度を修飾していると見ることもできるが、量を修飾していると見ることもできる。つまり「ご馳走」は数量的尺度の中でも「量」の方の属性に偏った名詞であるため、このような解釈が可能なのだと結論づけることができる。

では、D群の名詞が後接した場合はどうであろう。

（71）だいぶ離乳食にも慣れ、ちょっとの大きさのものなら食べるようになりました。

（72）ちょっとの注意や工夫で、目に見える効果が表れること請け合い。

どうやらD群の名詞が後接した場合も後接する名詞の程度的尺度を修飾するようである。（71）は「大きさ」の程度を、（72）は「注意や工夫」の程度を修飾している。

そして、さらに調べてみると、「ちょっと」には（73）のような使い方もあることがわかる。

（73）ちょっとのお出掛けでも紫外線予防はお忘れなく。

（73）は旅行のように長い時間の外出ではなく、すぐに家に帰ってくるくらいの外出であるというように見ることも可能だが、それよりも、「ちょっと」の機能の一つである「気軽な行動を表す」[18]の応用だと見るのが妥当ではないかと思われる。「気軽な行動を表す」というのは、

（74）「奥様、どちらへ？」「ええ、ちょっとそこまで。」
このスカーフ、ちょっとしてみてごらん。
お嬢さん、ちょっとお茶でもいかがですか。（現代副詞用法事典）

のような例に代表される、程度や数量、時間を表す機能とは別の「ちょっと」の一つの機能である。「の」を介した修飾の場合は後ろに名詞がつくので、「気軽な様子を表す」とでもしておこう。（73）の「ちょっとの」はその「気軽な様子を表す」と見ることもできる。他にも、

（75）価格もリーズナブルだし、ちょっとのお土産にも最適です。

---

[18] 飛田良文・淺田秀子（1994），「現代副詞用法辞典」，東京堂出版，　p292

（76）ちょっとの道具さえあれば、比較的簡単に自分でなおせますよ。

などがあり、数量を表しているようにも見えるが「ちょっとした」などに近い働きをするものである。ただ、（75）（76）も大きい枠組みで見ると程度的な尺度を修飾しているものと見ることができるだろう。

「ちょっとの」の機能を下にまとめる。

	A	B	C	D
ちょっと	（数）量	程度	（数）量	程度

４．１．７　かなり

Ａ群の名詞を後接させる場合である。

（77）著者はかなりの勉強家なんだと思います。
（78）昨晩かなりの美人を観た。

「かなり」が後接する名詞の程度が高いものであるということを表しているのは一目瞭然である。

Ｂ群の名詞が後接した場合はどうか。

（79）番組制作に関わる大道具さんもかなりの高学歴なんでしょうか。
（80）卒業式での演奏はかなりの好評だった。

（79）（80）も程度的尺度を修飾している。

では次にＣ群の名詞が後接する場合を見てみる。

（81）トンネル入り口の規制は無くかなりの車が待機したままだった。
（82）実際にはかなりの音楽家が彼の隠れファンなのではないかと思っている。

「かなり」は（81）では「車」の台数が多いということ、（82）では「音楽家」の数が多いということを表している。つまり数量的尺度を修飾している。これは他の多くの程度副詞と同じだが、例をもう少し調べてみると（83）（84）のような例も見られることがわかる。

（83）この車はかなりの車だ。
（84）シューベルトはかなりの音楽家だ。

（83）では「かなり」が車の数が多いことを表していないことは明白で、「この車」がとてもいい車だということ、つまり「この車」の程度が高いことを表していることがわかる。（84）もシューベルトがレベルの高い音楽家、つまり「音楽家」としての程度が高いということを表している。となると、先ほどの（81）（82）の例と合わせて考えてみると、C群の名詞が「かなり」に後接した場合には、数量的な尺度と、程度的な尺度の二つを修飾する機能があるということになる。しかしC群の名詞は程度的な尺度より数量的な尺度が想定しやすい名詞である。そこに程度的尺度というものを持ってきてはおかしいではないかという向きもあろうが、それは「数量的尺度が想定しやすい」というだけであって、程度的尺度が想定できないわけではない。現実に「美人」という語に程度的尺度も数量的尺度が想定できるように、「車」という語に、いい車、高い車、などのように程度的尺度を見出すことは可能である。となると、「かなり」にC群の名詞が後接した場合には解釈が二通りできることになろう。また、

（85）かなりの埃だ。

のような例もあるが、（85）の「埃」はC群に属する名詞である。しかしこれは「埃の量が多い」というような数量的尺度を修飾した解釈しかできない。それは「埃」という名詞に程度という尺度を想定しにくいからであろう。だからこの場合は数量的な尺度を修飾した場合の意味として解釈されるのだ。つまり文脈によって解釈が変わってくるということである。

最後にD群の名詞が後接した場合はどうであろうか。

（86）うちで飼っているミドリガメ、かなりの大きさになりました。
（87）今回の地震はかなりの規模です。

（86）（87）のようになり、「かなり」は後接する名詞の程度的尺度を修飾していることがわかる。

「かなりの」の意味をまとめると以下のようになる。

	A	B	C	D
かなり	程度	程度	程度・数量	程度

４．１．８　相当

A群の名詞が後接する場合を見てみる。

（88）きっと素敵な人だから相当の美人と付き合うだろうなどと勝手に思ってい

ました。

（89）カルピスがいつも冷やしてある家庭は、相当の金持ちだった。

（88）（89）も程度的尺度を修飾していることがわかる。

続いてＢ群の名詞である。

（90）実際に町に入ってみると、エクスポ会場があったりして、相当の大都市だった。

（91）猫の20歳は人間でいえば100歳前後ですか。相当の長生きです。

これらも「相当」は（90）では「大都市」の程度を、（91）では「長生き」の程度を修飾している。

ではＣ群の名詞が後接する場合であるが、

（92）相当の車と人が北谷に向かったと思われます。

（93）それにしてもパソコンの内部はそうとうの埃が溜まっていたのには驚く。

（92）は「相当」が「車と人」の数、（93）は「埃」の量を修飾していることがわかる。しかし、次のような例もたくさん見られる。

（94）よこさんが、そこまでオススメなら相当の店なのでしょう。

（95）香山君は、作家としても相当の人だが…

（94）の「相当」が「店」の数、（95）が「人」の数を修飾していないことは明らかである。とするとやはり、この場合も程度的な尺度を修飾していると見るのが妥当ではないだろうか。理由は４．１．７の「かなり」の項であげたことと同じ理由である。ということから「相当」もＢ群の名詞が後接する際には二種類の修飾機能を持つと言える。

最後にＤ群の名詞が後接する場合である。

（96）すでに相当の深さにまで菌糸が侵入していたであろうこと…

（97）相当のスピードでなければ追跡はしないものと思われます。

（96）（97）も後接する名詞の程度的尺度を修飾していると言えるだろう。

「相当」の修飾機能をまとめる。

	A	B	C	D
相当	程度	程度	程度・数量	程度

４．１．９　よほど

Ａ群の名詞を後接させる場合である。

（98）あなたがよほどの美人でないならば、難しいかもしれません。
（99）指導者はよほどの人格者でもなければ、戦争を終結させようなどとは思わないだろう。

のように、「よほど」が「美人」「人格者」といった後接する名詞の程度的尺度を修飾している。

Ｂ群の名詞も同様に、

（100）座って通勤なんてよほどの早起きで無い限り不可能です。
（101）よほどの大都市でないと、なかなか見つけるのが至難なようです。

のように「よほど」が後接する名詞の程度的尺度を修飾しているのがわかる。

続いてＣ群の名詞が後ろに来る場合を見てみる。

（102）よほどの車でない限り現在市販価格より高くなると思いますよ。
（103）よほどの店でない限り嫌われるということはないと思います。

（102）（103）は今まで見てきた多くの程度副詞と違って、後接する名詞の数量的尺度を修飾しているのでないことはすぐにわかる。だとしたら思いつくのは４．１．７の「かなり」、４．１．８の「相当」でも出てきた「程度」である。一見「なかなか」の項で出てきた「評価」という要素も思い浮かぶが、（102）（103）どちらの場合においても、「よほど」が「車」「店」をプラス評価しているのでないことはわかる。と考えると、やはり「よほど」には程度という機能があると考えるのが妥当であろう。

反面、次の例のような例もある。

（104）日本だと電車の扉の上はかなり高額な広告スペースだと思うのですが、そこにあえて注意書きをするということは、よほどの人がプラットホームに落ちて、電車を止めていることが伺えます。

（104）は後接する「人」の数を修飾する機能である。数はあまり発見されなかった

が、「よほど」にC群の名詞が後接した際に、数量的な尺度を修飾する機能もあることがわかる。

次にD群の名詞を後接させる場合である。

（105）よほどの大きさでないと肉眼では判別できません。

（106）今時よほどの出来じゃなけりゃ口コミで売れるなんてそうそうありませんよ。

（105）（106）も「よほど」は後接する名詞の程度的尺度を修飾しているのがわかる。

また、「よほど」の特徴として条件節で使われるケースが圧倒的に多いということがあげられる。ほとんどのケースにおいて

（107）よほどの＋名詞 ｛ がない限り / がないと / じゃないと / がなければ

このような形で使われ、そうでなければ

（108）よほどの＋名詞 ｛ なのだろう / に違いない

のような推測・推量を表す表現で使われることが多い。それは「よほど」の表す意味を考えるとわかる。「よほど」は後接する名詞の程度がはなはだしいことや、普通の程度を超えていることを表す。であるから普通はそれだけ名詞の程度が高いことはありえないわけである。普通ではありえない程度のことを表現しているのだから、条件付きの表現になったり、推測・推量の表現になったりするわけである。

「よほど」の性格をまとめると以下の通りである。

	A	B	C	D
よほど	程度	程度	程度・数量	程度

４．２　一部の名詞は修飾できない程度副詞

次に、３．３の調査において③に該当する程度副詞、つまりＡ，Ｂ，Ｄの名詞は修飾が可能だがＣ群の名詞は修飾できない程度副詞について一つずつ見ていくこととする。

４．２．１　いささか

「いささか」も「多少」「少し」「ちょっと」などと同様、小さい程度を表す程度副詞の一つであるが、Ｃ群の名詞を修飾する機能がないという点でそれらとは異なりを見せている。

まずＡ群の名詞が後接する場合である。

（109）「売るための工夫」と言う事については、いささかの疑問がある。
（110）子供3人の誕生日にはいささかのご馳走といってよいものをとり寄せていた。

（109）（110）の「いささか」はそれぞれ後接する名詞の程度的な尺度を修飾していると言える。

次にＢ群の名詞が後接する場合である。

（111）09時15分のフィンエアーAY-802便に乗るため、いささかの早起き。
（112）それからいささかの遠回りをさせられて元の道へと戻れる仕組みである。

（111）（112）も他の程度副詞と同様、やはり程度的尺度を修飾している。（111）は「早起き」の程度を、（112）は「遠回り」の程度を修飾しているのである。

ではＤ群の名詞が後接する場合はどうか。

（113）いささかの善を行うような気で揚々と出かけていきました。
（114）雇用の面にいささかの明るさが出てきたのかなという気がいたします。

他の程度副詞と同様、このように程度的尺度を修飾するようである。

以上が「いささか」の修飾機能だが、Ｃ群の名詞は全く後接させられないのであろうか。例は見つからなかったが、他の程度副詞がＣ群の名詞を後接させた例に「いささか」を代入してみると[19]、

[19] 「いささか」を代入する例文は、同じ小さい程度を表す「多少」「少し」「ちょっと」の例文から一つずつ、計三つ取り出した。

（52）朝５時前だと言うのに、多少の車が見られました。
（52）b ?朝５時前だと言うのに、いささかの車が見られました。
（61）三叉路になった峠の少し先の路肩には少しの車が駐車してあった。
（61）a ?三叉路になった峠の少し先の路肩にはいささかの車が駐車してあった。
（68）ちょっとのお菓子でちょっぴりしあわせ。
（68）a ？ いささかのお菓子でちょっぴりしあわせ。

のようになった。（52b）（61a）（68a）が全くの非文かと言われると、そうとも言い切れない感もあるが、不自然であることは確かである。また（48）のように数量的尺度が想定しやすいＡ群の名詞の前に「いささか」を代入してみるとどうなるか。

（48）多少の美人でも年をとっていれば、美人度で劣っている若い女にはかなわない。
（48）b いささかの美人でも年をとっていれば、美人度で劣っている若い女にはかなわない。
（56）少しの美人がいるだけで、会社の雰囲気は全く違うように見える。
（56）a ?いささかの美人がいるだけで、会社の雰囲気は全く違うように見える。

（48b）はある程度自然だと感じられるが、（56a）は不自然である。これは（48b）においては文章の意味上、「いささか」が程度的な修飾をしなければならないのに対して、（56a）は数量的な修飾をしなければならない。しかし「いささか」はＣ群の数量的尺度を想定しやすい名詞を修飾するのが難しいように、Ａ群の名詞においても数量的な尺度を修飾するのが難しいということを表している。つまり「いささか」には数量的な尺度を修飾する機能がないと言えるであろう。

「いささか」の機能をまとめる。

	A	B	C	D
いささか	程度	程度	×	程度

４．２．２　いっそう

まずＡ群の名詞が後接した場合である。

（115）一月後には皮膚が美しくなって一層の美人になり…
（116）起業家育成になおいっそうの近道となると期待されます。

（115）（116）のように、名詞の程度的尺度を修飾していることがわかる。

次にＢ群の名詞が後接した場合を見てみよう。

（117）次回から遠くの会場に変わるので、より一層の早起きをしないといけなくなる。
（118）若者はより理想に近い就職先を目指し、一層の高学歴を求めるようになっている

（117）（118）も 「いっそう」が後接する名詞の程度が高いことを表しているのは明白である。
次にD群の場合だが、次のような例がある。

（119）文字どおり国民のくらしにいっそうの痛みを押しつける項目が目白押しです。
（120）トンネルの照明のあり方もよりいっそうの明るさが求められます。

やはり、（119）（120）も後接する名詞の程度的尺度を修飾している。
では、C群の名詞は全く後接させられないのであろうか。実例は検出されなかったため４．２．１で行ったように、他の例文に「いっそう」を代入してみることにする。

（52）朝５時前だと言うのに、多少の車が見られました。
（52）c ?朝５時前だと言うのに、いっそうの車が見られました。
（61）三叉路になった峠の少し先の路肩には少しの車が駐車してあった。
（61）b ?三叉路になった峠の少し先の路肩にはいっそうの車が駐車してあった。
（68）ちょっとのお菓子でちょっぴりしあわせ。
（68）b ？ いっそうのお菓子でちょっぴりしあわせ。

このように、不自然な文になってしまう。「いっそう」には数量的な尺度を修飾する機能がないと言ってよいだろう。
「いっそう」の機能をまとめる。

	A	B	C	D
いっそう	程度	程度	×	程度

Ⅴ　体系的考察

Ⅳでは11に渡る程度副詞の「の」を介した名詞修飾について詳しく見てきた。その結果から、「の」を介した程度副詞の名詞修飾全体を見渡した時にどのようなことが言えるだろうか。Ⅳで得られた結果を視覚的に把握しやすくするために、表にして提示する（表４）。

表４：「の」を介した程度副詞の名詞修飾の施す意味

		A	B	C	D
イ	ちょっと	（数）量	程度	（数）量	程度
	少し	数量	程度	数量	程度
ロ	ずいぶん	程度	程度	数量	程度
	結構	程度	程度	数量	程度
	多少	程度	程度	数量	程度
ハ	かなり	程度	程度	程度・数量	程度
	相当	程度	程度	程度・数量	程度
	よほど	程度	程度	程度・数量	程度
ニ	なかなか	程度	程度	評価	程度・評価
	いささか	程度	程度	×	程度
	いっそう	程度	程度	×	程度

表４は「数量」の意味が強いと考えられるものほど上に位置するように配置してある。また同じ傾向が確認された程度副詞を一くくりにし、それぞれ「イ、ロ，ハ、ニ」といったグループ分けを試みてみた。

表４からも明らかなように、「の」を介した程度副詞の名詞修飾は、程度的尺度を修飾することと、数量的尺度を修飾することが基本的な働きだと言えるだろう。Ｂ群とＤ群の名詞が後接した場合、全ての程度副詞が程度的尺度を修飾した。それはＢ・Ｄ群の名詞が数量的な尺度を全く想定し得ない名詞だからであろうと考えられる。異なりが見えるのはＡ群とＣ群の名詞が後接した場合である。それはこれらの名詞が、見方によっては程度的尺度と数量的尺度といった二つの尺度を想定し得る名詞だからである。さらに言うと、後接する名詞のどういった性格を修飾という形で引き出しているか、つまり程度的尺度を修飾するのか、数量的尺度を修飾するのか、と言った差が程度副詞おのおのの性格の差だと言うこともできるだろう。そこ

で、表４のＢ・Ｄを除いたものを改めて表５として提示する。

表５：表４からＢ・Ｄ群を省いたもの

		A	C
イ	ちょっと	（数）量	（数）量
	少し	数量	数量
ロ	ずいぶん	程度	数量
	結構	程度	数量
	多少	程度	数量
ハ	かなり	程度	程度・数量
	相当	程度	程度・数量
	よほど	程度	程度・数量
ニ	なかなか	程度	評価
	いささか	程度	×
	いっそう	程度	×

表５を見ると、程度副詞それぞれの差が明白になってくる。イの程度副詞はロの程度副詞よりも数量的尺度を修飾する力が強く、ハの程度副詞はロの程度副詞よりも程度を修飾する力が強く、ニの程度副詞は数量的尺度を修飾することができない。つまりイ・ロ・ハ・ニの順で数量的尺度を修飾する力が強く、同時にこの順で程度的尺度を修飾する力が弱い、ということである。そしてさらには、「の」を介した程度副詞の名詞修飾の体系も、この「数量的尺度を修飾する力（数量性）」と「程度的尺度を修飾する力（程度性）」の関係で捉えられるのではないかと思われてくる。

「の」を介して名詞を修飾できる程度副詞は数量を表すことのできる程度副詞に限られている。また、量を表す副詞（「たくさん」「たっぷり」など）も「の」を介した修飾が可能である[20)]。そういったことから考えてみると、程度量の副詞の以下のような連続的な体系を想定できるのではないだろうか。（図３）

[20)] 仁田（2002）, p189　参照。
「たくさんの石」「たっぷりの果肉」などが例文として提示されている。

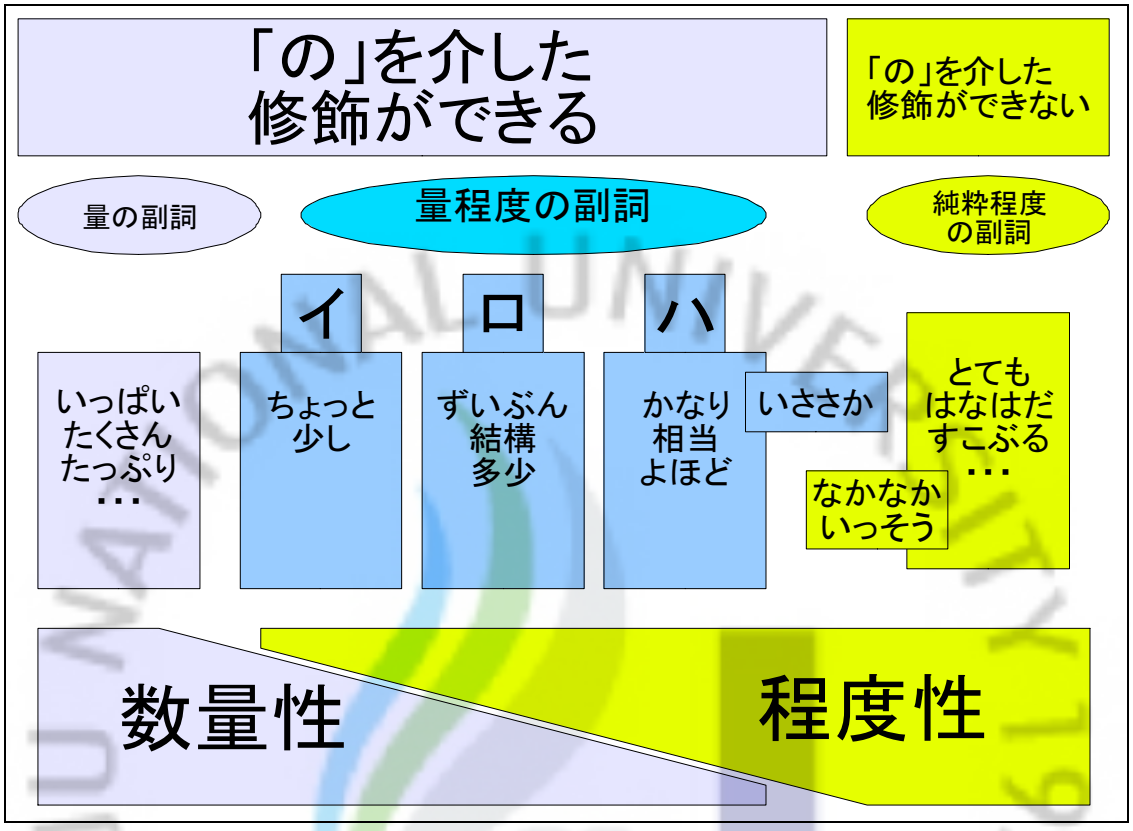

図３：数量性、程度性の大小と「の」を介した量程度副詞の名詞修飾の関係

「の」を介した程度副詞の名詞修飾を、程度量の副詞という大枠で考えた際、図３のような関係が想定される。同じ量程度の副詞であっても図３の左側に位置すればするほど数量的尺度を修飾する力が強くなる。そして極限まで数量を修飾する力が強くなれば量の副詞となり、程度的な修飾能力を持たなくなる。逆に右側に位置すればするほど程度的尺度を修飾する力が強くなり（数量的尺度を修飾する力が弱くなる)、さらに程度的尺度を修飾する力が強くなると、それは純粋程度の副詞になり、数量的尺度を修飾する力を全く持たなくなる。

つまり、程度的尺度を修飾する力と数量的尺度を修飾する力はまったく相容れないものではなく、程度副詞においては一方が強まれば他方が弱まるといった相互でバランスを取るような関係にある。そして程度副詞の性格というのも数量性の強さによって図３のような連続的な関係が想定できるのではないかということである。要するに図３のような配列は「の」を介した名詞修飾という枠を越えて、程度副詞の意味的な体系の一つであるともいうことができる。

またその程度副詞の体系の中で、数量的尺度を修飾する力がある程度副詞には「の」を介して名詞を修飾するという働きが備わっており、さらに、その中でも数量的尺度を修飾する力の大小によって、後接する名詞に対する意味的な働きかけが

変わってくるのだということである。

しかしそう考えると理屈と合わないと考えられる程度副詞もいくつかある。「いささか」「いっそう」「なかなか」である。「いささか」は量程度の副詞であるにも関わらず、数量的尺度を修飾する働きがないということと、「いっそう」「なかなか」においては純粋程度の副詞であるにも関わらず、他の純粋程度の副詞と違って「の」を介した修飾の形が存在するということの点である。

「いささか」については、それは量程度の副詞に含まれながらも、純粋程度の副詞に近いと考えられる。例えば、以下のような例がある。

（121）?今日は同行者の誕生日、いささか飲もうと話していましたが…

（121）のように数量を表す例もあるにはあるのだが、不自然な感は否めない。しかし非文であるというには抵抗がある、といったことからである。よって図３においては純粋程度の副詞と量程度の副詞の中間に位置するものとしておいた。

「なかなか」「いっそう」についてはその逆で、純粋程度の副詞に含まれながらも量程度の副詞に近いと考えられるからである。

（122）?今日はいつもよりいっそう歩いた気がします。

（123）?この週末の連休は 我輩としてはなかなか歩いたほうである。

のように（122）（123）のような数量を表す例が散見され、しかも非文とは断定しにくい。よって、先ほど挙げた「いささか」のように純粋程度副詞ではあるけれども、量程度の副詞に近い場所に位置するのではないか、と考えられる。そのために図３においては純粋程度の副詞と量程度の副詞の中間に位置するものとしておいた。ただし、これらを断定するには、何を以って程度を表すとするのか、何を以って数量を表すとするのかといったことを詳しく研究する必要があると思われる。

Ⅵ　おわりに

ここまで「の」を介した程度副詞の名詞修飾について、いくつかの角度から考察してきた。得られた成果をまとめると次の通りである。

1）対象とする程度副詞・名詞を限定し、どのような程度副詞がどのような種類の名詞を後接できるかを調べる調査を行った。その結果、以下のように程度副詞は３つにグループ分けできることがわかった。

①「とても・はなはだ・すこぶる・たいへん・きわめて・非常に・わりに・ばかに・やけに・やや・もっと・ずっと・はるかに・いちだんと」は名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができない。
②「ずいぶん・結構・なかなか・多少・少し・ちょっと・かなり・相当・よほど」は名詞の種類を問わず名詞修飾の形をとることができる。
③「いささか・いっそう」は一部の名詞は修飾できない。

2）「の」を介して名詞を修飾できる程度副詞がどのような意味をもって名詞を修飾しているかを調べるため、実際に使われている文章を例に挙げつつ、修飾の実態について細かく調べた。その結果、程度副詞は数量的尺度を修飾する力の大小によって、以下のようにさらに４つに分類できることが分かった。

①「ちょっと・少し」は、形容詞的な特徴が見られ、かつ数量的尺度を想定しやすい名詞群の名詞が後接した場合も数量的尺度を修飾する。
②「ずいぶん・結構・多少」は、数量的尺度を想定しやすい名詞群の名詞が後接した場合のみ数量的尺度を修飾する。
③「かなり・相当・よほど」は、数量的尺度を想定しやすい名詞群の名詞が後接した場合、数量的尺度を修飾することもできるが、程度的尺度を修飾することもできる。
④「なかなか・いささか・いっそう」は、数量的尺度を修飾することができない。

3）得られた結果を元に、さらに体系的な考察を行い以下のような結果を得た。

①程度副詞はそれぞれが持つ数量的尺度を修飾する力と程度的尺度を修飾する力の大小によって、純粋程度の副詞から量の副詞にまでつながる一つの体系があることがわかった。
②そのような体系がある中で、数量的尺度を修飾する力を持っている程度副詞に

は「の」を介して名詞を修飾する働きがあり、また後接する名詞に対する働きもそれぞれの程度副詞の数量的尺度を修飾する力の大小によって変わってくるということがわかった。

以上のように、本研究では「の」を介した程度副詞の名詞修飾について、その意味や体系を詳しく考察してきた。これまであまり言及されなかったこれらの体系について言及するなど、ある一定の成果は得られたと思われる。しかし、後接する名詞のグループ分けなどをもう少し詳細に行わなければならない点、「の」を介した修飾が可能だが数量を表すことができない程度副詞を研究しなければならない点など課題は山積みである。以後も更なる探求に努めていきたい。

JEJU NATIONAL UNIVERSITY 1952
JEJU 1952
제주대학교

参考文献

久野暲（1973），『日本文法研究』, 大修館

寺村秀夫（1982），『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』，くろしお出版

寺村秀夫他（1987），『ケーススタディ日本語文法』, おうふう

仁田義雄（2002），『新日本語文法選書３・副詞的表現の諸相』, くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1992），『基礎日本語文法』, くろしお出版

岡村和江（1988），「副詞および連体詞の境界―詞・辞分類との関係」松村明編『講座日本語の文法３　品詞各論』，明治書院

小野正弘（1997），「形容詞連用形における意味的中立化」『日本語文法　体系と方法』，ひつじ書房

小矢野哲夫（1995），「程度副詞としての『まるで』」『日本語・日本文化研究』第５号, 大阪外国語大学日本語講座

加藤久雄（1997），「程度副詞の反期待について」川端善明編『日本語文法　体系と方法』, ひつじ書房

木下恭子（2001），「比較の副詞『もっと』における主観性」『国語学』52号, 日本語学会

工藤浩（1983），「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』, 明治書院

近藤泰弘（1997），「否定と呼応する副詞について」『日本語文法　体系と方法』，ひつじ書房

佐野由紀子（1997），「程度副詞の名詞修飾について」『日本学報』16，大阪大学

竹内美智子（1973），「副詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座５　連体詞・副詞』, 明治書院

張麗群（1994），「否定の『ない』と呼応する程度副詞について」『言語学論叢』第13号，筑波大学一般応用言語学研究室

寺村秀夫（1968），「日本語名詞の下位分類」『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編』一，くろしお出版

渡辺実（1990），「程度副詞の体系」『国文学論集』23，上智大学国文学会

―――（1986），「比較の副詞―もっとを中心に―」『学習院大学言語共同研究所紀要』８号

金賢珍（2005），「日韓両言語の程度副詞と共起する名詞について ―「程度大」を表わす語を中心に―」『多元文化』５, 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻

松田明子（2005），『肯定・否定表現における日本語程度副詞について』九州大学文学部人文学科言語学・応用言語学専攻卒業論文

北原保雄（1981），『日本文法事典』，有精堂出版

飛田良文・淺田秀子（1994），『現代副詞用法辞典』，東京堂出版
松村明（1971），『日本文法大辞典』，明治書院
「ＧＯＯＧＬＥ」＜http://www.google.co.jp/＞

JEJU NATIONAL UNIVERSITY 1952
JEJU 1952
제주대학교

＜abstract＞

A Study on Degree Adverbs as Noun Modifiers through ‘の’

Shiro Sakuma

‘Adverb’ has been considered an insignificant teaching and learning item in the field of Japanese education. To speak natural Japanese, however, using appropriate adverbs is necessary. In fact, more and more researchers have studied ‘adverb’ recently, but there is still a lot more needs to investigate the use of adverb, and the use of ‘degree adverb’ – which gives information about the extent or degree of something - is not exceptional.

This study focuses on the use of degree adverbs as noun modifiers through ‘の’. Specifically, this study investigates under what conditions and with what meanings degree adverbs can modify nouns. The results of this study are as follow.

1) First, among the adverbs and nouns related to this study, this research explores what kinds of degree adverbs can modify certain kinds of nouns and what k inds of nouns can be modified by degree adverbs. The findings on this question are d ivided into three categories below.

①‘とても・はなはだ・すこぶる・たいへん・きわめて・非常に・わりに・ばかに・やけに・やや・もっと・ずっと・はるかに・いちだんと’cannot modify any kinds of nouns.

②‘ずいぶん・結構・なかなか・多少・少し・ちょっと・かなり・相当・よほど’ can modify whichever kinds of nouns.

③‘いささか・いっそう’ cannot modify certain kinds of nouns.

2) Second, the questions on what meanings these degree adverbs – which can modify nouns through ‘の’ – could add to modified nouns are answered by analyzing authentic Japanese sentences. It is revealed, as a result, that these degree adverbs could be divided into four categories based on the degree of quantity which nouns possess.

①‘ちょっと・少し’ shows adjective characteristics and modify nouns in noun phrases which are easy to measure quantitative degrees.

②‘ずいぶん・結構・多少’ quantitatively modify nouns in noun phrases only

easy to measure quantitative degrees.

③‘かなり・相当・よほど’ can quantitatively modify nouns in noun phrases only easy to measure quantitative degrees, and these adverbs also modify degree scale.

3 ‘なかなか・いささか・いっそう’ cannot quantitatively modify nouns. By analyzing what have been found so far, it is finally concluded as seen below.

①It is based on the modification strength of either degree or quantity which the adverbs have that degree adverbs can function as either degree or quantity adverbs.

②Degree adverbs can also quantitatively modify nouns through ‘の’, and the functions of these adverbs which the adverbs have on modified nouns can differ by the strength of quantity degree of the adverbs.

JEJU NATIONAL UNIVERSITY 1952
JEJU 1952
제주대학교